

オオタカ (*Accipiter gentilis*) の聴感度閾

○岩見恭子、山崎由美子、山田裕子 (千葉大・文・認知情報)、室伏三喜男 (上野動物園)、
百瀬浩 (中央農研・鳥獣害)、岡ノ谷一夫 (千葉大・文・認知情報)、
飯塚康雄、藤原宣夫 (国交省・国総研・緑化生態)

近年、イヌワシ、クマタカ、オオタカといった希少猛禽類の生息地がダムや道路建設事業の計画地に存在し、アセスメントの対象となる場合が多くなってきている。ダム建設や道路工事などによる騒音が猛禽類に与える影響を軽減するための対策が求められているが、生息地の特徴や基礎的な生態に比べ、生理学的特性については不明な点が多く、保全と両立した事業実施のための技術的な指針もほとんどないのが現状である。騒音や振動による猛禽類への影響が比較的少ない施工技術を確立するため、聴覚をはじめとする基礎的データを得る必要がある。そこで飼育下のオオタカを用いて聴感度閾の測定を行った。

2002年と2003年にそれぞれオオタカの雄、雌各1羽ずつオペラント条件付けを用いて訓練し、聴感度閾の測定を行った。呈示する刺激には6種類の純音(250Hz, 500Hz, 1kHz, 2kHz, 4kHz, 8kHz)を用いた。各周波数について音圧60dBから5dBずつ音圧を減少させた音を呈示し、それぞれの音について10回ずつランダムにテストを行い、正答率を計算した。

その結果、オオタカは2kHzの周波数に対して最も感度が高く、1kHzから4kHzのあいだに最適音域を持つことが示された。また雌雄間で周波数ごとの正答率の傾向に差はみられなかった。雌雄の正答率60%での可聴音圧の平均を計算し得られた聴感度曲線から、オオタカは0.25kHzでは35dB、8kHzでは43dBと感度は低いが、1から4kHzの間に最適音域をもち、2kHzでは可聴音圧が-0.5dBと最も感度が高いことが明らかになった。

オオタカの聴感度閾が明らかになったが、工事によって出される騒音は様々であるため、実際にどのような騒音が個体に影響を与えるのか、またそれによってどのような影響が与えられるのかを明らかにする必要があるだろう。